

システム化社会における保育の構造 —大人と子どもの教育的関係を中心に—

鬢 櫛 久美子

はじめに

1. 現代の子どもの<かかわり合い>における相互性の欠如
2. 教育的関係と<教育的関係>
3. 教育問題に見る相互性、互惠性の欠如
4. 「自分が形成される仕組み」

おわりに

はじめに

今日、学校教育の現場にはさまざまな問題が起きている。これらの問題の根底には、大人と子どもの<かかわり合い>の変容が潜んでいるように思えてならない。近代の学校制度が確立されるプロセスで、社会も学校の価値を中心に制度化され⁽¹⁾、大人と子どもの関係も、学校教育を中心とした教育者と被教育者の関係となってきたこと、ここにこそ注目して、教育の問題を検討すべきである。システム化社会における現代の保育の構造を考察し、保育者と子どもの関係、親と子どもの関係を中心とした大人と子どもの関係がいかにあるべきかを検討するのが本論文の目的である。

大人世代と子ども世代の<かかわり合い>に起きている変容とはなにか。いつの時代にも繰り返されてきた、「今時の若い者は」、「今の子どもは」といった大人世代が、子ども世代に自分達が前世代から言われた事も忘れたかのように言ってきた事とは、少し事情が異なるように思えるのである。これまで世代間で相対的な問題として、繰り返し言われてきたような内容であれば、気に留めないどころか反論さえしたくなる。なぜなら、自分が育ててきた世代を、「今の子どもたちは」と批判し非難することは、自分もかつては子どもであったことを省みず、今の大人としての発達課題も無視していることを考えると、はなはだ自分も

含まれる大人世代の無責任さに腹がたったりもするからである。ゆえに、ここで問題としている大人と子どもの関係の質の変容というのは、世代間のギャップに起因するようなこれまで繰り返されてきた事とは、少しばかり、いや大いに異なるように思えるのである。

1. 現代の子どもの<かかわり合い>における相互性の欠如

人間関係を結べない子どもが増えているといわれている。その意味するところを探ってみると、次のような場面が思い浮かぶ。

直接会って話すのではなく、電話や、インターネット等の機械を介在した間接的なかかわり合いに熱中する子供たちの姿。皮膚を触れ合い、互いの体臭や、息遣いを、あるいは視線を感じ、相手の表情を読み取りながらの生の関係は好まない。芹沢は、このような傾向は、消費社会が作り上げた清潔嗜好に関する説明している。⁽²⁾ 彼らは、他者の行動は気になり、常に相手の情報をキャッチしようとするいろいろな無機的媒体を駆使して躍起となっている。しかし、これらの情報は、自分のために捜し求めている情報であり、相手とのやり取りのための情報ではない。これらの情報を得るのは自分の満足のためであり、決して他者のためではない。我が身に置き換えて、人の身になってという相互性の欠如が感じられる。日常用

語で言うところの自己中心的な関心であり、互恵性は考慮の外にある。次のような、事例からも〈かかわり合い〉の相互性、互恵性の欠如が理解される。⁽³⁾

真夜中に、家族中が寝静まってから会った事も、顔も見ただことない人から、遠慮やわびの挨拶もなく、当然のような口調で電話がある。相手は、こちらの状況に何の配慮も無く自分のしゃべりたいことをしゃべる。どのようにしてこちらの情報を得たのかと問えば、ある学会の名簿だという。今日の社会では、プライバシーは本人の意思と関係なくあらゆる場所に露出している。とにかく相手に、このような時間の電話は迷惑だと言えれば30分時間が早まるくらいで、相変わらずこちらの様子を気遣うこともなく電話を掛けてきて高飛車な口調で話続ける。仕方なく、明日の予定もあるし、こんな時間の電話は迷惑であると言って切る。顔も表情も分からない人と話すことに抵抗がある他者の気持ちを、相手は何も感じないのだろうか。要件を聞いても別にないようだし、自分が誰かと話したいという欲求を満たすための電話で、相手の利害は全く考慮していない。夜中に電話するなど、道徳教育、あるいは、しつけができていないといえればそれまでかもしれない。しかし、いっこうに相手のことを考えることなく話すことができる、これはどういう事だろう。人間関係の持ち方に問題があるような気がしてならない。相手の身になって考える、相互性、互恵性の欠如なのではないだろうか。上述したような事例に見られる、〈かかわり合い〉の相互性、互恵性の欠如は、大人と子どもの〈かかわり合い〉の質の変容に起因すると考える。そして、この変容はシステム化社会における教育的関係が、学校を中心にした〈教育的関係〉となり、その他の〈かかわり合い〉における関係のあり方を規定しているからだと考える。

2. 教育的関係と〈教育的関係〉

〈教育的関係〉と〈 〉により括って表現する場合は、教育主体と教育客体と教育内容と教育方法からなるシステム化された教育、すなわち学校教育における教育者と被教育者の関係を指す。現代のシステム化された社会における教育的関係

は、学校教育における〈教育的関係〉を反映したものである。現代の教育問題から、教育の現状分析をすると、このようにあらかじめ定義したシステム化社会における〈教育的関係〉が教育的関係としてよいものかどうかという問題と、義務教育年限に達する前の幼児期の教育、あるいは保育における大人と子どもの関係が学校教育期間における〈教育的関係〉と同じ又はそれに類似した、教育者と被教育者の関係であってよいものかどうかという問いが成り立つ。これらは、全く別の問いとして答えが用意できるものではないだろう。しかし、あえてここでは、乳幼児期に焦点を当てて大人と子どもの〈かかわり合い〉を考え、そして乳幼児期の教育的関係はいかにあるべきか、〈教育的関係〉であって良いのかも検討し、保育の構造を考えてみたい。

教育的関係という言葉は、最近、教育学の研究には用いられるようになったが、日常生活の中ではあまりなじみのない言葉である。本研究では、教育の意味合いを帯びるすべての人間関係を指すためにこの言葉を用い先の〈教育的関係〉と区別する。親と子、教師と生徒、保育者と園児、幼稚園教諭と園児といった大人と子どもの教育的関係を考察の対象とする。

「教育」の意味は歴史とともに変遷してきた。現代のシステム化社会における「教育」は、江戸末期から明治にかけて学校教育制度を欧米から輸入するにあたって education の翻訳語として定着した。⁽⁴⁾ 江戸時代や、それ以前は、親の養育のありかたを示したり、エリート養成を指す言葉であった。西洋でも、education という言葉は、その語源をたどれば、「産育」⁽⁵⁾ を意味し、現代のようなイメージは、近代に入り民衆教育のための学校教育が制度化されてからの事である。ゆえに、現代の〈教育的関係〉は、システム化社会における「教育」的人間関係であり、歴史的にはきわめて特異な関係である。日本では、親子の関係、大人と子どもの関係が〈教育的関係〉となりはじめたのは、1872年に学制が布かれ「近代国家が家族のもつ世代の再生産機能に介入」し、義務教育という形で、教育を国が管理、統制し、子どもの教育は親の責任とされたことに始まる。親子関係が〈教育的関係〉に学校教育のシステム化とそれに伴う

社会の学校化の中で変容していったものと考え
る。

国家の介入により、家族のもつ世代の再生産機能は変容し、親の役割は子どもを学校へやることとなった。教育的関係から<教育的関係>への変容は、義務教育制度の導入に始まるのである。そして教育は、専門の人間によりされることになった。その結果、家庭における世代の再生産能力は減退しはじめた。国家の介入は、特殊な大人と子どもの関係へと子どもを閉じ込めることで、地域社会の世代の再生産能力の減退も招いた。現代に言われる地域社会の教育力の減退は、ここに始まったといっても過言ではないだろう。制度化された教育の力は、子ども達を対立した個人へと仕立て上げ、立身出世主義、学力（能力）主義を生み、家庭や地域の世代の再生産機能を退け、学校が教育の機関として排他的に成長していった。この背景には、近代社会があらゆる人々の絆を破壊していったことが潜んでいることを見落としてはなるまい。今日の間人関係にこのプロセスが影響していると考え。

学校化された社会では、学校における<かかわり合い>のありようが、その他の人間関係を再生産している。その結果、大人と子どもの関係も教育者と被教育者から成る<教育的関係>へと加速的に変容した。

3. 教育問題に見る相互性、互惠性の欠如

教育問題も、相手も自分と同じ人間という相互性と、自分が生き生きすると同時に相手も生き生きとするという意味での互惠性の欠如が原因であるように思える。

いじめたら相手がどんな思いをするか、それを想像する事ができたら、他者の身に自分を置き換えて想像することができたら、事態は、変わるのではないだろうか。神戸の小学生殺害事件を例に考えてみよう。人を殺す前に、もし自分が殺される立場だったらと立場を逆転させることができたら、犯行には及ばなかったのではないだろうか。またもし、自分が殺害され首を切られたら、自分の親はどんな思いをするだろう。そんな思いを自分の親にさせたいか。親の身になって考えることができたのなら、つまり他者の立場に立つことが

できたら、事件は起きなかったかもしれない。他者は自分をどのように見ているのだろう、他者として自分を見ることができていたらどのような結果が生まれていたのだろう。

犯罪とまでいかなくとも、もっと身近な例で考えてみよう。自分がつねられたら痛い。この現実を踏まえて、他者の立場に立ち、相手を自分がつねたら、相手がどんな思いをするか、痛みを感じるかを想像する。他者の身になり、他者の立場に立ち、他者としての自分を見る能力が相互性を支えていると考える。

相互性は、現実に行動に移す前に、想像する能力が必要となる。このような想像する力、空想する能力は、いつどのようにして私たちの中に発達するのか。いつどのような形で私たちの身体と、心に芽生えるのだろうか。それは、「自分が形成されるしくみ」の中にあると考える。発達段階から考えると、エリクソンのエピジェネティックチャート⁽⁶⁾の5のテーマの空白の縦の柵目での発達である。かけがえのない自分というアイデンティティが形成されて後に、かけがえのない自分と、他者の立場を入れ替えることが初めてできるのではない。かけがえのない自分も、立場を他者から見ればとりもなおさず他者であり、私にとっての他者はかけがえのない自分であること、この逆転現象を活用してまず他者が存在し、その他者を媒介にかけがえのない自分が現出するのである。そして、かけがえのない自分が現出する前に身体としてのまとまりが、自他の区別をするために発達しなければならないことをアイデンティティ形成のプロセスから、以下に説明していくこととする。この間の発達を現代の大人と子どもの<教育的関係>のありかたが阻害していると考え。現代では、大人と子どもの関係が、学校教育における<教育的関係>となっている。保育の現場も同様である。家庭や保育の現場での大人と子どもの関係はいかにあるべきか。エピジェネティックチャートの5の空白の縦の柵目における発達を検討し考察する。

4. 「自分が形成される仕組み」

1) エピジェネティックチャートの空白の柵目

エリクソンのエピジェネティックチャートの5

のテーマの空白の枠目を読み解く目的は、以下の2つである。第1は、他者の身になること、自分の身から他者の身を推測すること、自分とは異なる他者を思いやること、これらは大人と子どものやり取り行動を通して「自分が形成される仕組み」の中で学習されることを明らかにすることである。第2は、「自分が形成される仕組み」の中で、大人と子どもの〈かかわり合い〉は、前成人期以降、大人と呼ばれる存在に、自分が形成された後自分を捨てる能力が課されていることを、主張することにある。

エリクソンのエピジェネティックチャートは、『幼児期と社会』に発表されて以来エリクソンの発達理論の根幹を成してきた。⁽⁷⁾ 図に表されているとおり、エピジェネティックチャートは、IからⅧの発達段階と8つのテーマからなる64個の枠目から構成されており、アイデンティティの形成がテーマとなるのは青年期である。プラスとマイナスの傾向からなる心理社会的危機と、そのバランス感覚から獲得されるvirtueが記されている対角線上の枠目以外の56の空白の枠目が重要な意味を持っていることは、別の紙面にて考察した。⁽⁸⁾ つまり、各発達段階は、固有なテーマをもっているが、それらのテーマが問題となる前の発達段階においても、それらのテーマは先取りに経験され、そして固有の時を過ぎた後も各発達段階に見合うよう修正され再び獲得し直されるのである。このようにエリクソンの発達理論をエピジェネティックチャートを基に理解すると、アイデンティティが形成されるまでには、どのような先取りの準備がなされているのだろうか。言い換えれば、エピジェネティックチャートの5のテーマのアイデンティティとアイデンティティの混乱の末、忠誠というvirtueを獲得する段階に至るまでにどのような発達の準備がなされているのだろうか。発達第1段階乳幼児期から、第2段階幼児初期、第3段階遊戯期、第4段階学童期における、テーマ5の縦の空白の枠目において起きている発達の中身を検討してみたいのである。そして、青年期以降にアイデンティティとアイデンティティの混乱という課題にどのように取組み直し、それぞれの発達段階に見合う形で忠誠というvirtueを修正し、再獲得するかについて前成人期、成人期

を検討する事で、〈かかわり合い〉における大人という存在を明らかにしたい。

2) 鏡体験

エリクソンがエピジェネティックチャートにおいて空白にしている内容を理解したいのであるから、エリクソンの理論を読み解くこととあわせて、他の理論により補わなくてはならない。ラカンの鏡像段階論⁽⁹⁾と、ワロンの発達理論、⁽¹⁰⁾ 1970年以降の乳幼児の発達心理学の実験データ⁽¹¹⁾や、動物行動学の実験のデータを補完的に組み合わせることで、空白の枠目の意味を説明することを試みる。

ラカンは、生後6ヶ月から1歳半までの時期を「鏡像段階」(stade du miroir)と読んだ。⁽¹²⁾ ラカンによれば、人間は、生まれたばかりは自分の身体をひとつのまとまりとして認識することができない。また自他の区別もついていない。このような状態から鏡像段階において鏡に移る自分の像を次第に自分であると認識できるようになると言った。この段階の子どもを鏡の前に連れていくと、「おお」と声を上げ小躍りして喜ぶ、これを繰り返しているうちに鏡で遊び、やがて自分の身体をまとまりを鏡像から得ようようになるのである。

鏡の前において、鏡に写る像が自分の像であると認識できるようになるためにはどのような能力が必要であろうか。この問題を説明できれば、鏡体験をとおして、自分の身体をまとまりを獲得するまでのプロセスが分かる。このプロセスをまずは、動物行動学の実験観察の結果を用いて、人間の発達と比較検討してみよう。アンリ・ワロンの説明⁽¹³⁾を参考に、動物の鏡体験についてまとめよう。

鳥類例えばインコやアヒルは、鏡を前にしてどのような反応をするのだろうか。ワロンによれば、ある番いのアヒルは雌をなくした後、自分の姿を映す倉庫の窓ガラスの前にいる習慣がついた。おそらく自分の姿が、連れ合いのいなくなった不在感をいくらか埋め合わせたのだろうのである。そして、このような反応をするアヒルの観察から、鳥類は自他の区別もなければ、実物とガラスの反射からくる像の区別もついていない進化の段階にあるということがいえる。

では身近な動物、犬や猫はどうであろうか。犬や猫は鏡のそばに連れて行こうとすると、足を踏ん張ってそれ以上近づくのを阻止しようとするという観察結果が述べられている。犬や猫に鏡を見せようとしたことのある人は世間には結構多くいて、その人たちの声を集めると一様に、犬や猫に鏡を見せようとするのが嫌がり、無理にも鏡の前に連れて行こうとしたり、鏡をもって近づくのを逃げ回る、というのである。鏡に映る像は犬や猫にとっては、アヒルのように実在のものとも思えないし、また表象であるとも思えない様で、理解しがたく、単に犬や猫を混乱させるもの以外の何物でもないらしい。

高等猿類は、鏡に映った自分の像を見るやまは威嚇してみるものであるが、やがて手を鏡の後ろに回したり、鏡の後ろに何かいないかと確かめ、何も無いことが分かると悔しがるといことが観察されている。仮説を立て、それを確かめるべく試行錯誤をし、説明がつかないことに腹を立てている。この段階は、現実と、現実の知覚を一致させようとしているのであり、二重化ができてきている進化の段階である。

チンパンジーやオランウータンといったさらに人間に近いといわれている動物になると、高等猿類と同じように鏡の前で試行錯誤を繰り返すうち、鏡に映る姿が自分だと分かったような行動、すなわち大きく口を開き歯の間に挟まったごみを鏡を頼りにとるなどのしぐさを始めるということである。

1977年の『アメリカンサイコロジスト』に、チンパンジーの鏡を用いた自己認識の能力を実験的に確かめた報告が、G.G.ギャラップによりなされている。⁽¹⁴⁾ チンパンジーを鏡の前で十分に遊ばせ、自己認識ができたと思われるような行動が観察された後、麻酔をうち眠らせる。そしてチンパンジーが寝ている間に、目の周りに隈取りの化粧を施すのである。鏡で確かめるまで気がつかないように、視覚的にしか察知できない塗料、つまり匂いも無く、皮膚や毛がごわごわしたり、すーとしたりすることのないものが用いられた。目覚めたチンパンジーを鏡の前に連れて行くと、あっと驚いたような反応をした後、目の周りの化粧を落とそうと手で擦り取りはじめたのである。この

ような実験結果から、チンパンジーのレベルの猿は、鏡体験により自己認識が可能な進化の段階にあることが確認されている。ケーラーによれば、チンパンジーは、自分の写真が分かる位だということである。

では、人間の子ども、赤ちゃんは、どのような発達をするのだろうか。個体発生は、系統発生を繰り返すといわれるが、上述の動物と比較検討してみたい。ここでも、ワロンの理論⁽¹⁵⁾を主として参考に進めていくことにする。

3ヶ月位の赤ちゃんを鏡の前に連れていっても反応はない。4、5ヶ月すると赤ちゃんは、初めて会う人を見るように鏡を見たり、微笑みかけたという報告がなされている。6ヶ月目頃には、鏡の中の自分と父親の顔を見て微笑んだ。しかし、父親の話し声が自分の後ろから聞こえると、びっくりしてそちらの方へ振り向いたという。こうした経験を繰り返すうち、赤ちゃんは鏡の中に自分が知っている人を見つけると、その人の方を振り向くようになる。しかし、7ヶ月になっても鏡の中に見える父親の実物の方へ振り向くのに拘わらず、鏡の中の自分の姿をつかもうとしたり、素通しのガラスの向こうに父親が居ると、途方に暮れてしまうというのである。このような観察結果を総合すると、お父さんに対して振り向くのは、映像を実物の反映として解釈できているからではなく、映像がその声に対する手がかりになるからだと思われる。この段階の行動は、映像と実物の区別がつかない状態、又は、目にみえる像が全部「実在化」している状態とも解釈できる。従って、ガラスに映る像を自分の連れ合いと思ったアヒルと同じで、鳥類の段階といえる。

1歳を過ぎる頃になって、やっと鏡の後ろに手をまわして映像の本体をつかもうとしたり、小さな鏡であるならばひっくり返して鏡の裏を確かめる。鏡の中の姿が「にせもの」だということ、自分の姿の反映だということに、少しずつ気がつきはじめる。チンパンジーに対応する時期といえる。これは、知能の面においても、道具の使用等から「チンパンジーの年齢」といわれる時期である。1歳半に近づくと子どもは、鏡の映像を「分身」として、つまり自分自身とは違うものとして、遊ぶようになる。そして、いままでの段階に時々

逆戻りすることも繰り返しながら、自分の運動と鏡の中の像との連動性を確かめるような行動を、2歳頃には始めるようになる。自分がいろいろと体を動かしてみるにより、鏡の中の像の見えかたの変化を確かめ両者のつながりを理解するようになる。見える身体と感じられる身体を理解することができるようになるのである。この頃には、鏡に映った自分の姿を見て、自分の名前を呼ぶといった行動も見られるようになる。

3) 自己認識と生き生きとした<かかわり合い>

動物の進化にも匹敵する、このような鏡を用いて自己認識ができるようになる子どもの発達、自分の身体のみとまりを得ることができるようになる発達は、人間の中に本能的にあらかじめ組み込まれたものなのであろうか。サルトルが言うように、幼年期に圧倒的な自己認識の目覚めを決定的に経験することは突如として起こる⁽¹⁶⁾ことなのか。それとも、何らかの発達の準備が脈々と営まれているのか。後天的に学習されるものなのであれば、どのような条件が環境として必要とされるのか。エリクソンが人格の発達において主張するように、人と人との生き生きとした<かかわり合い>なくしてはなせないものなのだろうか、この点を明らかにしたい。ここでは、チンパンジーを対象にした、SD、ヒルとギャラップたちの研究が参考となる。

生後すぐに親から隔離されて育てられた、1歳半前後のチンパンジー3匹を2匹は同じオリの中で、あと1匹は別のオリの中で育てた。2匹はじゃれ合い取っ組み合ったりして自由に遊んだ。残りの1匹は、他の2匹と遊ぶことはできないが、2匹のチンパンジーの姿はいつも見る事ができた。このようにして3匹を1ヶ月ほど育てた後、鏡に十分慣れ親しませ、先のチンパンジーの実験と同様に麻酔をして眠らせ、目の周りに隈取りの化粧を施した。そして鏡の前で自己認識能力のテストがされた。その結果、一緒に育てられた2匹のチンパンジーは、普通の個体と同じような「びっくり」反応を示したが、1匹だけで隔離されて育てられたチンパンジーには、そういった反応は一切認められなかった。この実験の結果から、鏡の中の像を自分の表象であると認めることがで

きるためには、視線による社会的な交流だけではなく、身体を用いた直接的な接触がなくてはならないということがわかる。したがって、このような自己認識の発達は、遺伝的に組み込まれたものではなく、学習によるものであり、さらには、身体を介した生き生きとした<かかわり合い>なくしては発達しないものであるといえる。

4) 生き生きとした<かかわり合い>と身体図式

次なる問題は、この生き生きとした<かかわり合い>は、鏡の中の像を自分の像と認識するのにどのような働きをしているのだろうかということである。

日常、われわれ大人は鏡を覗いたとき、そこに映る顔が自分の顔であることに疑いを持たない。もし持つとすれば、それはかえって不自然なことである。自分の顔は、決して直接見ることはできないにも拘わらず、疑うことなく鏡を見て髪を解かし化粧をする。この、自明性を支えているものは何か。その理由として、鏡の前に立ち自分の手を翳してみ、それに鏡の中の像が連動した動きをすれば、自分が映っていると証明することができる。大半の人が答える。この答は自分の筋肉の運動の感覚と視覚イメージが一致し、それと鏡の中の動きの関係を理解していることが前提条件である。またある人は鏡に向かっていろいろな表情をすれば、そこに映ったのは自分の顔だということができる。しかし、例えば、口を大きく開いて「あー」といった、その顔は一度も直接には見る事ができないわけで、口の周りの筋肉を緊張させ「あー」といった場合に、その筋肉の動きが他者からどのように見えるものなのかを、私どもはどのようにして学ぶことができるのか、この点が問題となる。つまり、筋肉に伝えられる運動命令と、表情等の外見上の変化の対応を学習しなければ、鏡体験による自己認識はできないことになる。いつ頃どのようにして学ぶのだろうか。鏡の前で遊んでいただけで、果たして可能なのだろうか。

身体遊び、スキンシップが自己認識能力の成長に重要な役割を果していることは、先ほどのSD、ヒルとギャラップたちによるチンパンジーの実験

から明らかである。身体遊び、スキンシップを通して何が学習され発達しているのであろうか、この点をさらに検討してみよう。

AメルツォフとM.K.ムーア等によれば、新生児は、顔の表情を読み取ることができるというのである。⁽¹⁷⁾ この研究は、新生児を座らせておき、実験者が、赤ちゃんに向かって以下の4つの行動を一定の間隔で繰り返しやってみせる。1.舌を突き出す2.口を大きくあける3.口を尖らす4.手を握ったり開いたりする。このような実験者の行動に対する赤ちゃんの反応をビデオテープに収録した。次に、実験の目的や仮説について知らない実験者とは別の観察者がビデオの分析をした。

結果は、4つの動作のいずれに対しても赤ちゃんは、同じ動作つまり模倣した動作で応答した回数が一番多かった。この実験結果から、AメルツォフとM.K.ムーア等は、新生児でもものまねができることを主張した。また、筋肉運動の変化と、体の見えかたの変化との対応関係を知る能力は、生後間もない赤ちゃんでも確認され、生まれつきの能力であると結論づけた。しかし、他の研究者たちの追試では、必ずしも検証されず、生まれつきの能力であるという主張は、全面的には指示されていない。彼らが主張するように、模倣能力が生まれつきであるとまで言えなくとも、彼らの実験結果から、模倣に似た行動、すなわち相手の行動にシンクロナイズした(共鳴した)行動をする能力を赤ちゃんはかなり早い時期から持っているといっただろうか。意味も分からないはずなのにこちらのリズムに併せて声を出し、大人の声掛けにあたかも返事をしているかのように感じられる事が首も据わらない時期の赤ちゃんにもあることは経験されている。生後2、3ヶ月の赤ちゃんが、大人の表情を真似たり、6ヶ月くらいの赤ちゃんが手や頭を振ることを模倣し始め、1歳をすぎた頃には、真似てほしくないことまでも、うっかりすると真似られて、苦笑することも多くの人が経験し認めるところである。したがって、AメルツォフとM.K.ムーア等の実験の結果を、日常場面での経験的な観察等と総合していえることは、模倣反射、共鳴動作は生まれつき持っているといっただろう。一方、筋肉運動の変化の感覚と、体の見えかたの変化との

対応を知る能力、つまり身体図式は、生き生きとしたくかかわり合いにより学習されるといっただろう。

5) 大人からの働きかけ

筋肉を使って自分の体を動かすことと、その外見上の変化との関係を、鏡体験から学ぶという説明は、大人の側からの発想で赤ちゃんには不適切だと考える。鏡の中の自分の像を認識できるためには、筋肉を使って自分の体を動かすことと、その外見上の変化との関係を何らかの方法で学ばなくてはならない。これは、まず、自分の身体の目にみえる部分と、他者の身体との対応から始まると考えるのが妥当だろう。例えば、手や足の動きとその見えである。日常生活の場面で考えると、赤ちゃんが「がらがら」を元気に振っている姿を見て、大人が別の「がらがら」を大げさに振ると、赤ちゃんがさらに同じように嬉しそうに手を振る。このような対応関係は、まずは模倣反射によって起きているのかもしれない。こういったやり取り行動が繰り返されるうちに、次第に自分の筋肉運動とその見えが確認される。やがて、直接には視覚的に認識できない身体の部分まで、他者の身体の見えを媒介にして身体図式を創り上げていくと考えられる。また、聴覚刺激を手がかりにして学習発達が進んでいくこともあるだろう。赤ちゃんが「あー」といったその瞬間を逃さず、大人が赤ちゃんの顔を覗き込んで同じように「あー」という。この繰り返しの中で、大人と子どもの身体を用いた模倣行動、やり取り行動の中で、赤ちゃんは、「あー」という時の筋肉への命令と、筋肉感覚とその見えを、音刺激と大人の顔を媒介にして、筋肉運動、聴覚、視覚の関係した身体図式を創り上げている。これが出来上がることで、鏡の中で手を振っているのは、あるいは「あー」といっているのは自分であると、正確には自分の像であると認識できるようになるのである。

ラカンが、人間はバラバラのまま生まれてくるといった⁽¹⁸⁾が、上述のような大人と子どもとのやり取り行動を通して、身体図式ができることにより鏡の中の自己認識も可能になるのである。言い換えれば、鏡体験の前に、大人の体を鏡にしたやり取り行動、T.G.R.バウアーがいうところの「随

伴的な関係」⁽¹⁹⁾が自分の身体と大人の身体の対応をつけることを可能にし、ひいては、身体のみを獲得することを可能にするのである。以上の議論を要約すると、バラバラで身体のみを保持せず、自他の区別も持たない赤ちゃんが、鏡を用いて自己認識ができるようになる2歳くらいまでの間には、鏡体験と同様あるいはそれ以上に、自分の身体と他者の身体を用いた身体遊びが重要な役割を果たしているといえる。以上が、エリクソンの理論の乳児期、幼児期初期における発達であり、ラカンの鏡像段階との照合である。

1匹で隔離されたチンパンジーの実験結果からも推察できるように、赤ちゃんの共鳴動作、模倣反射といった生まれつきの能力は、大人、他者からの働きかけなしには、活用されないということである。大人の側から、子どもの模倣を引き出すような働きかけ、これが第一歩となることを忘れてはならないといえる。また、鏡像という他者や、現実に存在する他者に自分を映すことから、他者の身になり、他者の立場に立って、他者から見た自分を思い描くことで、身体としてのまとまりを得ることができたのである。

6) 想像、空想による同一化からアイデンティティ形成へ

このようにして、得られた身体のみを基に、子どもは自他の区別がつくようになる。この身体のみを手がかりに、次の段階では、鏡に自分を映したように、鏡の中の像ではなく実際に存在する他者に自分を置き換え、あこがれ同一化を始める。これがエリクソンの発達段階における遊戯期の5のテーマの枠目において営まれている発達である。子どもは身近な大人の存在を同一化の対象とする。お父さんのようになりたいと考える男の子が、お母さんを自分のものと思いたいと思うエディプス期といわれる段階にあたる。そして、関係の範囲が広がるに連れて、同一化の対象は選択の範囲を増やしていく。保育園、幼稚園に通うようになれば、あこがれの先生もその対象となる。保育者を目指す学生の中には、青年期までの紆余曲折を乗り越え、最終的な同一化の対象が幼稚園や保育所の先生であり、それがアイデンティティ形成に大きく影響している例も多々見ら

れる。ままごと遊びをとおして、お父さんになり、おかあさんに扮して見る。ごっこ遊び等で自由に空想し想像することで、もし、あこがれのお母さんだったらどうするか空想してみるのものである。また幼児番組のキャラクターや、絵本の登場人物にすっかり成りすましてしまうこともあるだろう。このように同一化は、想像の世界で他者の身になってみることを通して進められる。従って、子どものペースで、自由に想像、空想の世界を楽しむ時間と、空間を環境構成することが大人に求められる。また、あこがれ、同一化したいような大人、子どもの目から見て輝いている魅力的な大人が人的環境として存在しなければならない。フィクションの世界からも同一化できるような対象を提供できるとよい。例えば、子どもの夢を掻き立てるような主人公、登場人物のいる絵本や、物語の読み聞かせなども有効であると考えられる。

また学童期に入ると、さらに関係の範囲は広がり同一化の対象も増える。勤勉性と劣等感という発達の心理社会的危機から、virtueとして達成意欲を獲得するこの発達段階においては、現実の他者だけを対象とするのではなく、文字を始めいろいろなメディアを通して知ることができる他者にも同一化をする。テレビや物語の主人公にあこがれたり、発達段階に見合った他者をモデルとして同一化を繰り返すうちに、次第に他ならぬ自分、かけがえのない自分を捜し求めるようになる。これが、エリクソンの言うところの青年期のアイデンティティとアイデンティティの混乱というテーマとなるのである。他の誰とも異なる、自分を見つけ青年期の忠誠という virtue を獲得する。

7) 大人—自己放棄することのできる存在

青年期に獲得したアイデンティティ「自分が自分であるという感覚」を「自己放棄 (self-abandon)」⁽²⁰⁾ することにより、前成人期には親密性対孤立という心理社会的危機の中で、相手を受け入れ、親密性のバランスが孤立を上回り、愛という virtue を獲得するのである。この発達段階において、5のテーマは「自我喪失の恐怖 (a fear of loss)」⁽²¹⁾ に打ち勝ちいったん獲得したアイデンティティを放棄し作り直すのである。前成人期の大人は子どもとの〈かかわり合い〉の中で、子ど

もを受入れ子どもの自身が自分を形成することに関わりながら、自らのアイデンティティを形成し直すのである。

成人期は、ジェネラティヴィティ（生み出すこと、育てること、教育すること）と停滞の葛藤のすえ配慮（care）という virtue を獲得する発達段階である。エリクソンは、ジェネラティヴィティという言葉を用いて、「自己放棄」によりくかかわり合い>に開かれ、他者との間に何かを生み出すことを意味している。ジェネレイトされるものは、子どもであったり、ものであったり、思想あるいは、くかかわり合い>そのものであったりする。そして、生み出すように応答していくためには、「自分自身に固執しない能力⁽²²⁾（the ability to lose oneself）」⁽²³⁾が重要となるとエリクソンは言っている。

前成人期、成人期を中心とする大人という存在は、このような大人と子どものくかかわり合い>として子どもの「自分が作られる仕組み」に関与することで、大人として自分を作り直していくのである。つまり、子どもの「健康な」成長を愛情を持って育むことで、「愛」や、「配慮」といった virtue を獲得しながら、アイデンティティを形成し直しているのである。大人と子どものくかかわり合い>には、それぞれの発達段階に応じた「自分を形成する」営みがあり、異世代間の相互形成がなされている。エリクソンが、mutuality と呼ぶところの、相互性、互惠性の意味が理解できた。

おわりに

エリクソンのエピジェネティックチャートの5のテーマ、アイデンティティとアイデンティティの混乱の危機を乗り越えて忠誠という virtue を獲得することに、青年期以前の4段階はどのように先取的に取り組んでいるのかを、ラカンの鏡像段階、ワロンの理論、そして発達心理学や、動物行動学の実験成果を総合して説明を試みた。

他ならぬ自分というアイデンティティが形成されるプロセスは、まずは自他未分離の状態から、自己の身体のみを得ることから始まる。大人の発想からすれば、まず自分が存在し、自分以外のものを他者とするのであるが、身体のみを得る前には、他者が存在し、他者との身体を

使ったやり取り行動（遊び）なくしては発達は成し遂げられない。このやり取りの中から、他者の身体を鏡として、自分の身体の見えを獲得する。このプロセスにおいて自分の身を他者の身に置き換えて考えることをしているのである。乳幼児期や幼児期初期に自分の成り立ちを支えているものは、大人と子どもの関係とすれば、まずは、子どもの共鳴能力を引き出すように大人から子どもの動作を模倣し、子どものシンクロナイズした行動を強化することである。これは、無理に強制させられてすることでもなく、本来大人が赤ちゃんを見ると、やわらかな丸い赤ちゃんのもつ特徴に誘われて、自然に赤ちゃんのペースでゆっくりと話し掛けたり、そっと触れたりする大人の社会的能力である。実は、赤ちゃんは他ならぬこの社会的行動を大人に誘発する能力を持っているのである。これこそ、赤ちゃんが有能であるといわれる所以である。生き生きとしたくかかわり合い>を結び、「健康な」発達を駆動させる能力を赤ちゃんは持っている。大人も、「健康に」発達していれば、それに答える能力を獲得しているはずである。

鏡に映る自分のイメージに同一化をすることで、身体のみを得ることが可能になった子どもは、自他の区別を得て、身近な大人に同一化をするようになる。遊戯期の子どもにとって、大人と子どものくかかわり合い>は、同一化の対象としての大人の存在が重要となる。また、学童期以後の子どもにとっても、同一化の対象となる大人、対象を提供できる大人であるべく、大人自身が子どもとのくかかわり合い>の中で、自分を形成し直すことが必要となる。

「自分が作られる仕組み」の発達プロセスにおいて、そのスタート地点から、他者の身になり、他者の立場に立ち、他者からの見えを想像する事が、要求されていることが明らかとなった。そして、このプロセスが発達段階にそって健康に発達していくためには、大人と子どもの身体を使ったくかかわり合い>に支えられていることも解明された。さらに、大人と子どものくかかわり合い>は、相互形成的なものである事、言い換えるなら相互性、互惠性を特徴としているものであることが理解された。

現代のシステム化社会における大人と子どもの

関係は、教育者と、被教育者の〈教育的関係〉と
なっていると述べた。この〈教育的関係〉には、
相互性、互惠性が欠如しているのであるから、幼
児期における大人と子どもの〈かかわり合い〉で
あるところの、親と子、保育者と園児の関係は、教
育者と被教育者からなる〈教育的関係〉を脱し、
本来の「健康な」発達が営まれるよう、エリクソ
ンの発達段階論から大人と子どもの関係を見直し
て行かねばならない。保育の構造も、相互性、互
恵性からなる生き生きとした〈かかわり合い〉へ
と再構築することを提案する。

註

1. この現象をI. イリイチは「学校化社会」と呼んだ。また、田中毎実は、「学校複合体」と説明している。(田中毎実、「ホスピタリズムと教育における近代」、『近代教育フォーラム』第2号、1993年、p.55。)
2. 芹沢俊介、『他界と遊ぶ子どもたち』、青弓社、1991年、p.83～。
3. 相互性、互惠性は、エリクソンのmutualityに相当すると考える。エリクソンの相互性、異世代間の相互形成については、鬘櫛久美子、「エリクソンの〈vital involvement〉と異世代間の相互形成」、『研究紀要』No.19、pp.101-116.にて論じた。
4. 箕作麟祥が、1879年にeducationを「教育」と翻訳したことに始まる。
5. J.J.ルソー、今野一雄訳、『エミール』上、岩波文庫、1926年、p.32。ルソーは、紀元前1世紀のローマの学者ワローの言葉を引用している。「産婆は引きだし、乳母は養い、師傳はしつけ、教師は教える」とかかわれているが、この中で、産婆と乳母の仕事を目指すのが、educationである。
6. エピジェネティックチャート(出典、Erikson, *The Life Cycle Completed*, pp.56-57.)
7. 鬘櫛久美子、「エリクソン理論における漸成的発達図式の検討—Virtue概念を基軸に—」、『教育哲学研究』第66号、1992年、pp.15-28。
8. 鬘櫛久美子、『〈かかわり合い〉の人間学—「教育的関係」論の地平—』、(博士取得論文)1998年、p.58～。
9. J.ラカン、宮本忠雄訳、「〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階—精神分析の経験がわれわれに示すもの—」、『エクリ』I、弘文堂、1962年、pp.123-134。
10. アンリ・ワロン、久保田正人訳、『児童における性格の起源』、明治図書、1965年。
11. infant、喋ることのできない者である乳幼児は実験の対象の外に長い間おかれてきたが、1970年頃を境目に発達心理学の分野で、実験方法が駆使され研究が進んだ。
12. ラカン前掲書、p.125。
13. ワロン前掲書、第2部自己の身体を意識し個別化すること、第4章自分の身体とその外部知覚的な表象、A鏡の前の動物の挙動(p.190～)
14. Gallup Jr., G.G., 1997, Self-recognition in primates — A comparative approach to bidirectional properties of consciousness *American Psychologist*, May 1977, 329-338.
15. サルトル、佐藤朔訳、『ボードレール』、pp.40-41。
16. 分裂病や、アルツハイマーの人に見られる「対鏡症状」
17. Meltzoff, A.N. & Moore, M.K. 1983, The origins of imitation in infancy: Paradigm, phenomena, and theories. In L. Lipsitt & C. Rovee — Collier (Eds.) *Advances in Infancy Research II*. Norwood: ALEX.
18. ラカン前掲書、p.129。
19. Bower, T.G.R. 1974, *Development in Infancy*. San Francisco: Freeman. 岡本夏木他訳、『乳児の世界』、ミネルヴァ書房、1974年。
20. E.H. Erikson, 1968, *Identity Youth and Crisis*, W.W. Norton, p.136.
21. *Ibid.*, p.136.
22. the ability to lose oneself の訳として谷村千絵の「E.H. エリクソンのジェネラティブイティの概念の考察—人と人とのかかわりの中にある『大人という存在』—」日本教育学会第57大会発表レジメ p.3, p.7から援用した。
23. E.H. Erikson, 1950, *Child and Society*, W.W. Norton, p.239.

老年期 VIII								統合 対 絶望、嫌悪 英知
成人期 VII							ジュネラティグティ 対 停滞・自己欺瞞 配慮	
前成人期 VI						親密 対 孤立 愛		
青年期 V					アイデンティティ 対 アイデンティティ欺瞞 忠誠			
学童期 IV				勤勉性 対 劣等感 達成意欲				
遊戯期 III			自主性 対 罪悪感 目的					
幼児期初期 II		自律性 対 恥、嫌悪 意志						
乳児期 I	基本的信頼 対 基本的不信 希望							
	1	2	3	4	5	6	7	8

エピジェネティックチャート